

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520593

研究課題名(和文) 海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する基礎的研究

研究課題名(英文) THE BASIC RESEARCH ON COLLABORATIVE LANGUAGE TEACHING BY NON-NATIVE SPEAKER JAPANESE TEACHERS AND NATIVE SPEAKER JAPANESE TEACHERS

研究代表者

門脇 薫 (KADOWAKI, Kaoru)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40346581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：海外の日本語教育における教師は、その多くが現地の日本語非母語話者教師(以下「NNT」)である。特に高校では、教員免許を持つNNTが主に指導にあたるが、日本語母語話者(以下「NT」)がNNTと共に日本語を教えるようになってきた。

本研究では、まず日本語教育におけるNNTとNTの教師間協働に関する文献調査を行い、この分野に関する実践や研究が非常に限られていることを数で示した。また、NNTとNTの教師間協働の実態を明らかにするため、特に高校での日本語学習者及びNTが多い韓国とタイをフィールドに、実態調査を行った。その結果NTに求められる資質・役割、及び教師間協働の実態と問題点が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Although in 'Teaching Japanese as a Foreign Language (TJFL)', majority of the core Japanese Teachers are Non-Native Speaker Japanese Teachers (NNT), team-teaching by Japanese Native Teachers (NT) working with NNT has become more widespread, especially in high schools overseas. The study first started with a review of documents and reports related to collaborative language teaching by NNT and NT. It was revealed from such review that there had been very limited research or study done on the subject in the past. This subsequently led to new field studies conducted in South Korea and Thailand. The outcome of these new researches brought to light issues related to the subject matter i.e. the needs, conditions and backgrounds of NT (as required by NNT and learners), the actual situations and problems in such teaching environment.

研究分野：日本語教育

キーワード：中等教育の日本語教育 教師間協働 非母語話者教師 母語話者教師 韓国 タイ 教師の役割

1. 研究開始当初の背景

海外における日本語学習者数は、約 380 万人に達し、その約 6 割が初等・中等教育による学習者数である（国際交流基金の 2012 年の日本語教育機関調査）。最近日本のサブカルチャーに関心を持つ若い日本語学習者が増え、特に 2000 年以降のここ 10 年程の間にアジア地域を中心とした中等教育機関において日本語学習者が増加している。国際交流基金の同調査によると、海外の JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境で教える日本語教師数 63,805 人のうち、その 7 割が日本語非母語話者教師 (Non Native Teacher: 以下「NNT」) である。中等教育では現地の教員資格を持つ NNT が主に指導にあたっているが、このような学習者急増の動きに対応すべく目標言語の母語話者である日本語母語話者教師 (Native Teacher: 以下「NT」) が NNT と共に教えるケースが増加した。

一方国内では、日本語教師養成課程修了者が海外で日本語を教える場を求めている。以上のような国内外の動向により、海外の日本語教育の現場において、NNT と NT が共に指導を行うようになった。しかし、双方の教師にはどのようなことが求められており、どのように協働で指導すればよいのかについての方法論が議論されることがなく、現場では多くの問題点が生じている。そのため両教師がストレスを感じるばかりでなく、派遣された NT が有効に機能していないという問題が生じている。海外の日本語教育は国によって事情が違っても JFL 環境という共通点があり、日本国内の日本語教育とは異なるものである。しかし、現在日本語教育においては NNT と NT の協働に関する研究はほとんど見られない。グローバル化が進む中、今後も海外の日本語教育において NNT と NT の協働がますます必要となる。本研究は、よりよい日本語教育のための NNT と NT の協働のあり方を考察しようとするものである。

本研究グループは、これまで数年にわたって NNT と NT の協働に関する研究と実践に携わってきた。代表の門脇は、1998 年より 2001 年まで国際交流基金日本語教育専門家として韓国に勤務し、その経験とネットワークを生かしてこれまで韓国の高校の日本語教育における授業研究を続けてきた。そして、韓国の学習指導要領の目標を達成する一つの新たな指導法として、韓国人の NNT と NT のチームティーチング (Team Teaching: 以下「TT」) を提案し、実際に韓国の高校で NNT と TT を実践した (門脇 2007)。その後韓国では、地方の教育庁 (日本の教育委員会) が独自に NT を採用し、NT が中等教育の正規の日本語授業で教える例も見られるようになり、筆者が提唱する方向に動いてきた。しか

し、実際にどのような NT が、NNT とどのように指導を行っているかその実態は明らかになっていない。同じような問題意識を持った研究分担者である中山は、タイの大学で日本語教育に携わった経験があり、タイをフィールドに NNT と NT の教師間協働に関する研究を行っている。現在学習者が急増しているタイの中等教育においては、両教師の協働が必要であり、この分野の研究が差し迫った課題であることを強く感じている。研究協力者の高橋は、ベトナムの民間の日本語学校及び国際交流基金の指導助手として日本語センターで日本語指導を行い、TT の実践の経験もある。日本に帰国後も NNT と NT の教師間協働について研究を続けている。研究協力者らと共に 2011 年に天津で開催された日本語教育研究世界大会において、教師間協働についてポスター発表したところ、世界各国の教師が「よりよい NNT と NT の協働」のあり方を模索しており、本研究の更なる発展を望む声が非常に多かった。したがって、特に、最近の学習者の増加によって、NT のニーズが高まっている中等教育の日本語教育に焦点をあてて、NNT と NT の協働についての研究を進めていくことにした。

2. 研究の目的

本研究は、海外の中等教育の中でも、学習者数の多い高校を対象にし、日本語教育における NNT と NT の教師間協働の現状と問題を明らかにすることを目的とする。

特に、2000 年以降現地の NT に対するニーズが増え、NT の占める割合が多い韓国とタイの高校を対象にする。韓国のように学習者数が多く高校の日本語教育の歴史が長い国と、タイのように今後日本語教育が発展していく国とは事情が異なるが、教員免許を持つ現地の NNT が主になり、NT と共に現場で指導にあたるという点で共通点がある。韓国とタイの高校で両教師の協働について実態を調査・分析することにより、海外の日本語教育全般に関わる現状と課題、または各国で応用できる点などが浮き彫りになると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 文献収集・資料収集

海外の中等教育における日本語教育、教育制度、外国語教育制度について文献及び資料収集

(2) 文献調査

教師間協働に関する先行研究

(3) 海外調査

韓国とタイの高校における TT の調査
高校訪問、NNT・NT 及び学習者対象の聞き取り調査
韓国とタイの高校の NT を対象にした

質問紙調査

4. 研究成果

(1) 研究経過

平成24年度から26年度の3年間にわたり、資料収集・文献調査・海外調査・研究会開催・研究成果の発表等の一連の研究活動を行った。

1年目には、海外の中等教育における日本語教育の情報収集、及び教師間協働に関する先行研究の文献調査を実施した。海外の日本語教育情報収集のため、本研究に関心のある日本語教育関係者で「教師間協働研究会」(本研究メンバー間のみ)を立ち上げ、研究会を開催した。2年目も、引き続き海外の中等教育における日本語教育の情報収集、及び教師間協働に関する先行研究の収集を行い、収集したデータの整理・分析を行った。更に、韓国とタイのNTを対象とした教師間協働に関する実態調査を実施した。3年目は、文献調査及びタイと韓国における調査のデータ分析を行い、それぞれの成果発表を行った。メンバー以外にも、NTに関する研究に取り組んでいる研究者や、上記の国以外の国の日本語教育支援にかかわった外部の講師を招き、勉強会を行った。また、本科研プロジェクトの研究成果を、各年度に学会発表や論文にまとめ、平成27年3月に報告書を発行した。

(2) 研究成果まとめと今後の課題

本研究は、「教師間の協働による言語教育(collaborative language teaching)」(Nunan 1992)をテーマにしている。日本語教育において非常に重要であり今後発展が望まれるにも関わらず、これまで研究が進められてこなかった「海外の日本語教育におけるNNTとNTの教師間協働」について、特に高校での日本語学習者及びNTが多い韓国とタイをフィールドに実態調査を行った。

平成24年度から26年度までの3年間の研究において、JFL環境にある韓国とタイの高校の日本語教育におけるNTとNNTの教師間協働の現状と課題の一端を明らかにすることができた。

文献調査では、日本語教育における教師間協働に関する先行研究を行った。日本語教育関連の論文集に掲載された5,038本の文献を調査したところ「海外の日本語教育」「教師同士の関わり合い」「NNTとNT」の全てに言及している文献は37本(0.7%)であった。これまで日本語教育においては、「学習者間」の協働に関する実践及び研究は行われているが、教師間協働に関する実践や研究が非常に限られていることが、数の上で示された。

研究当初はNNTとNTの授業における実践例や、授業デザイン例等の文献も収集するこ

とも考えていたが、上記のとおり教師間協働に関する文献が少ないため、まだ実践例の公開という段階まで至っていない。しかし、実際は各国でTTや、NNTとNTの協働による日本語教育が実践されており、数は少ないが現地語で発表されているケースもあるだろう。今回は、日本語教育における教師間協働の位置づけを知るため日本で公刊されている文献の調査を中心に行ったが、今後は現地語によるNNTとNTの協働の教育実践も調査する必要があるであろう。

韓国とタイにおける海外調査では、まずはどの高校にNTが勤務しているかを調査するところから始まった。国際交流基金の「海外日本語教育機関調査」には、NNT及びNTの人数が記載されているが、どの高校にどのようなNTがいるかについては把握できない。また3年に一度の調査なので、その間NTの異動もあり実態と異なることもある。本研究では、韓国とタイの調査協力者の協力も得て、NTを対象にNNTとの教師間協働に関する質問紙調査を実施した。また、NNTとNTがTTを実施している複数の高校を訪問し、授業観察、NNT・NT・学習者への聞き取り調査を実施した。

韓国の調査では、韓国全体の高校を対象にNTとNNTの協働の実状について調査することができた。韓国では、外国語高校と一般系高校でNTが採用されているが、特に2000年半ば以降に、外国語高校が各地にできたことから、NTが日本語を教えるようになってきた。教育庁採用のNTは、アシスタント教師として、NNTとTTを行うことが多い。英語圏の国のように民間のアシスタント教師派遣プログラムによってNTが日本から派遣されるのではなく、韓国では現地でNTが採用されている。また、日本語教育について韓国の大学や大学院で学ぶことができる。全体的な傾向として、NTは韓国語で韓国人のNNTや他の教職員と意思疎通が可能であり、NNTの日本語能力も高いためNTと日本語で意思疎通が可能である。また、生徒も「NTと日本語で話したい」と思っている。したがって、NNTとNTの教師間協働がしやすい環境であると言える。しかし、実際には、TTの具体的な方法がわからないことがNNT及びNTの双方から問題点として挙げられた。

タイの日本語教育は、親日的な土壌や日本文化の流入により中等教育における日本語学習者が急増し、NTのニーズが高まっている。このような状況により、タイは新人の日本語教師が赴任しやすい国として考えられているようである。タイでのNT対象の調査によると、タイのNTの日本語教育年数は「1~3年」の短期間が一番多かった。また、タイの

教師間協働の特徴として、「NNT と関わりがない」という NT が 3 分の 1 もいたことが挙げられる。高校のような職場環境では、大学のように各科目が独立した授業を担当するのは異なり、NT はアシスタント的な立場なので、一般的に NT は NNT とは何らかの関わりを持って日本語を指導すると考えられる。しかし、実際は NNT と NT が日本語またはタイ語で意思疎通をするのが難しかったり、NNT が「日本語に自信がない」という消極的な態度から NT に授業を任せきりにしたりすることもあり、共に関わりを持ちながら指導できていないケースがある。タイの日本語教育においては、NNT と NT の協働に関するテーマで教師研究会やセミナーが行われ、『国際交流基金バンコク日本文化センター紀要』等にも教師間協働に関する報告がなされており、他の国と比べると教師間協働について関心が高いようである。しかし、これまでは大学における NNT と NT の協働に関する研究が大部分であった。したがって、今回本研究で実施したタイの高校における教師間協働に関する調査結果は、タイの教師間協働研究において、新たな知見を提供することができたと言える。

その他、海外の中等教育における日本語教育支援を行った経験や、NNT との教師間協働の経験のあるメンバーらによる「教師間協働研究会」を合計 10 回開催し、海外の日本語教育について意見交換し理解を深めることができた。

以上、3 年間の研究期間において、日本語教育における教師間協働の先行研究の少なさから、TT の授業での実践例や教師間協働の具体的事例を収集するということまで進めることはできなかったが、韓国とタイの高校の日本語教育における NNT と NT の教師間協働の実態を明らかにするという研究目的はおおむね達成することができた。

実際に海外で日本語を指導している NT のバックグラウンド、求められる NT の役割、教育環境や日本語教育事情に関する情報等、本調査で明らかになった数々のデータは、日本語教育において海外の日本語教育事情を知る貴重な資料になると考えられる。国内で行われている日本語教師養成においても海外で日本語を教える際の情報として広く還元できる。海外の NNT・NT を対象にした教師研修においても、よりよい授業のための研究資料を提供できるであろう。

海外の中等教育の日本語教育というのは、その国のそのときの教育政策や言語政策によって大きく変化する。現地でも日本国内でも、予算化され突然 NT が採用されたり、NT が派遣されるプログラムが始まることもある。実際に、本研究の 3 年目には、国際交流基金の

派遣による「日本語パートナーズ派遣事業」が開始された。主に ASEAN 諸国の中等教育に日本語母語話者をアシスタントとして派遣するもので、2020 年度までに 3,000 人余りの日本語母語話者が中等教育の日本語授業に参加することになる。今後ますます NNT と NT との教師間協働の場は広がることは確実である。今後日本語教育の分野の発展と学界の全体的なレベルアップをめざすには、現在の「日本人教師 (NT) 中心」「日本国内偏重」の日本語教育のみならず、海外における NNT と NT の協働を研究することが必要不可欠である。特に海外の中等教育の日本語教育は、今後学習者が日本語学習を続けていくかを決定する非常に重要な位置づけにある。今後も継続して、各地での具体的な協働実践の事例を収集し、具体的な TT による指導方法等、教師間協働のあり方について研究していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

Kadowaki, K. (2015) Japanese Native Speaker teachers at High Schools Teaching as a Foreign Language. *Native-Speakerism and Beyond: Constructing the Vision of the Post-Native-speaker language teacher. Proceedings of the 1st and 2nd International Symposia on native-Speakerism 2015*: 144-157

中山英治・門脇薫・高橋雅子 (2015) 「日本語非母語話者教師と母語話者教師による教師間協働の実態調査報告 - タイの高校における協働環境と協働内容 - 」いわき明星大学人文学部研究紀要』第 28 号 (査読有) いわき明星大学、pp.19-34

門脇薫 (2015) 「韓国の高校における教師間協働の実態と課題 - 母語話者教師対象の調査より - 」『海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する研究』 pp.15-33

高橋雅子・門脇薫・中山英治 (2015) 「教師間の協働に関する研究の状況 - 海外での日本語教育における非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する文献調査から - 」『海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する研究』 pp.51-60

門脇薫・中山英治・高橋雅子 (2014) 「日本語非母語話者教師と母語話者教師の協

働の現状と課題 タイと韓国の高校における母語話者教師対象の調査による考察 - 』『2014 年度日本語教育学会 秋季大会 予稿集』pp.141-146 (査読有)日本語教育学会

[学会発表](計9件)

門脇薫・中山英治・高橋雅子「日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働の現状と課題 タイと韓国の高校における母語話者教師対象の調査による考察 - 』『2014 年度日本語教育学会 秋季大会予稿集』pp.141-146 日本語教育学会 口頭発表(2014年10月12日、富山県富山市、富山国際会議場)

Kadowaki, K. Japanese Native Speaker teachers at High Schools Teaching as a Foreign Language. *Native-Speakerism and Beyond: Constructing the Vision of the Post-Native-speakerist language teacher. Proceedings of the 1st and 2nd International Symposia on native-Speakerism (Saga Prefecture, Saga city, Saga University, September.30th, 2014)*

高橋雅子・門脇薫・中山英治「海外における非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する文献の分析 文献調査から見えた教師間協働の可能性 - 』日本語教育学会 関西地区研究集会 口頭発表(2014年9月6日、大阪府大阪市、大阪 YMCA 国際専門学校)

中山英治・門脇薫・高橋雅子「日本語非母語話者教師と母語話者教師による教師間協働の実態調査報告 タイの高校における協働環境と協働内容 』タイ国日本研究国際シンポジウム ポスター発表 (2014年8月26日、タイ、バンコク、チュラロンコーン大学)

門脇薫・中山英治・高橋雅子「海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の教師間協働の実態と課題 韓国の高校における母語話者教師の調査より - 』日本語教育国際大会 口頭発表(2014年7月11日、オーストラリア、シドニー、シドニー工科大学)

門脇薫「タイの高校の日本語教育におけるティームティーチング 学習者対象の調査を中心に 』タイ日本語教育研究会

第25回 年次大会 口頭発表(2014年3月22日、タイ、バンコク、国際交流基金バンコク日本文化センター)

門脇薫「韓国の高校における日本語母語話者教師の役割 高校生対象の調査より 』韓国日本学会 第74回 国際学術大会 口頭発表(2014年2月8日、韓国、ソウル、中央大学)

高橋雅子・門脇薫・中山英治「教師間協働研究に関する現状と課題 - 日本語教育における文献調査より 』第22回 小出記念日本語教育研究会 ポスター発表 (2013年6月8日、国際基督教大学 東京都三鷹市)

中山英治・松尾憲暁・門脇薫・高橋雅子「持続可能な『教師間協働研究』を目指して 教師間協働研究の理論的な枠組みの試案と協働研究事例 』タイ日本語教育研究会 第25回年次大会 分科会口頭発表(2013年3月16日、タイ、バンコク、国際交流基金バンコク日本文化センター)

[図書](計1件)

研究成果報告

門脇薫・中山英治・高橋雅子(2005)『海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する基礎的研究』全160ページ

[その他](計1件)

セミナー発表・ワークショップ

門脇薫・中山英治・高橋雅子・松尾憲暁「日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働」(2015年3月14日、ベトナム、ハノイ、名古屋大学法教育研究センター)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

門脇 薫 (KADOWAKI, Kaoru)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40346581

(2) 研究分担者

中山 英治 (NAKAYAMA, Eiji)
いわき明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：50546322

(3) 研究協力者

高橋 雅子 (TAKAHASHI, Masako)
青山学院大学・非常勤講師